

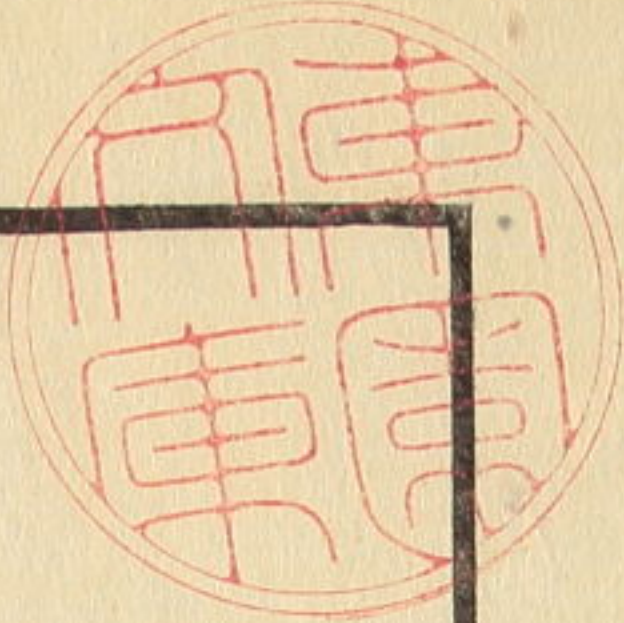


散木弄稿集探注
二

特別
イ 4
3163
98(2)



貴
14
3163
98(2)



拾遺集
いひ月のまののこりて
ふきのしらべのしらべなり

玉葉集
鎌倉右大臣
たけふかまのまのこりて
秋のこころのしらべなり
和訓抄云風ひやふら冷やうと字書
少題風涼と注あり

散木弃訶集^{卷一} 第三

秋部

七月

百首^の中^の 秋^の 目^と 心^と あり

^極百
ちとをみまのしらべなり
身^の 秋^の 立^ふ 小^{なり}

夕^の 風^の 吹^く 秋^の 心^を あり

永^久百首
秋^の 心^を あり 秋^の 心^を あり

晚風告秋

夕^の 風^の 吹^く 秋^の 心^を あり
乃^の 心^を あり 秋^の 心^を あり

○散木集

三ノ



曾丹集

夏衣のうらや人のあやうむ
新呉抄集云あつれりうらやうむ
しく身のけつとちりうらやうむ

萬葉集八卷 安貴王
秋立雨幾日毛不有者世宿流朝開
之風者手本寒母

新古今 俊成
秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

新撰字鏡 堀加和久
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

詞花集 伊家
秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

源氏紅葉賀卷云中
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

永百 秋

秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

千載 秋

秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

堀百 秋

秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

逐夜風涼

秋のうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

萬葉集十卷

足玉手毛由良織旗乎君之
御衣之織粹堪可聞
衣裳又御衣等とみり訓リ

奥儀抄云人かひらうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

我母見うらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

頼政集
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

今撰集 左大臣家
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

清輔集
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

頭注云此等八人間五十年下天一昼
夜と云ふとあるは八人五十年

○散木集

人のうらやうむ七月七日のうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ
あつれりうらやうむあつれりうらやうむ

頭注云此哥は長恨哥の七月七日長慶
 夜半無人私語時在天願為比翼鳥在
 地願為連理枝云々云々
 頭注云此は文雅と云う七日朝の
 万葉のうたのうたのうたのうたの
 和訓華山彦冊子繪廻廻家集補注を
 考へ
 新古今集 経信
 花見ふくくやうのうたのうたの
 心の中
 史沖云厚武少人等の泪のうたの
 もん
 うたのうたのうたのうたの
 うたのうたのうたのうたの
 やうのうたのうたのうたの

頭注云万葉云々方天のうたのうたの
 けり川陽ておと神世の恨天印
 こと天のうたのうたのうたの
 日本紀の符と云うてと云う押手
 のうたのうたの

夫木
 こりあもあも昔はうらむらむのあせのな
 夫木
 ねあれたるうたのうたのうたの
 千載 類題
 月詰
 新古今
 万代
 妻題
 織女宿曉
 夫木
 百首歌中
 玉葉 聖樂
 七夕朝イ
 織女 後永 朝
 永百 彦星
 夫木 万代 妻題

たなごつめのつゝ助辞也棚機妻
 ふあふす

宮曲抄むさしむさしむさしむさし
 しむさしむさしむさしむさしむさし
 ろいむさしむさしむさしむさしむさし

頭注云云々云々草と云うたりて
 たまに清いあはれと云うて
 万葉集のうたのうたのうたの

○散木集

八月
 八日花とくつり
 わい見えて
 八月

百首歌中
 千載 妻題
 堀百
 晩見野花

秋くれ
 百首歌中
 千載
 妻題

此歌の「馬」とは「つ馬」と云ふ
「つ馬」は「つ馬」の「つ」は「つ」
「つ馬」は「つ馬」の「つ」は「つ」
和名鈔云唐韻云龍名竹器也

神中抄云吉野の靖の小野小判の
蜻蛉とあまのつとよし然而は哥とい
まのつとよしとよしとよしとよし
旁其いれり俊頼朝臣哥云吉
野の云ははらりとのとよしとよし
なと就てよめり万葉の訓や
めると見定て可詠三吉野といま
たるはあまのつ小野

夫木鈔秋三永仁三年大神宮社宜哥合
たらひぬとよしとよしとよしとよし
んミとぬ人いあ
此判者云はらりとのとよしとよし
む女郎花袖とあまのつとよしとよし
つれとよしとよしとよしとよし
昔高野云あまのつとよしとよしとよし
一考かり雄略帝秋津野との御歌
其地はあまのつとよしとよしとよし
まらあまのつとよしとよしとよし
よりしとよしとよしとよしとよし
北吉澤衣四巻考一
おたけとよしとよしとよしとよし
慶女らとよしとよしとよしとよし
しりり米とよしとよしとよしとよし

かひり八名をそとむす源平盛
表記名折とよしとよし
古今集
秋とよしとよしとよしとよし
ゆふとよしとよしとよしとよし

編百 毎編
あまのつとよしとよしとよしとよし
必題注
とよしとよしとよしとよし

大殿影修の中子秋の燈
かろをとりたる雨よしとよしとよしとよし
雨
とよしとよしとよしとよし

夫木
我とよしとよしとよしとよし
編百
野花隨風
とよしとよしとよしとよし

妻題
かろをとりたる雨よしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよし

播磨 夫木
みり 世のあまのつとよしとよしとよしとよし
神
霧隔女節花
とよしとよしとよしとよし

夫木
とよしとよしとよしとよし
雨 中女節花
とよしとよしとよしとよし

とよしとよしとよしとよし
女節花とよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよし
左京東屋節花の家とよしとよしとよしとよし

とよしとよしとよしとよし
丹波前日季房の家とよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよし

頭注云懐胎の女をい目さくゆりて
 云て保へりし見れ色色の色
 是世間不思議事其心のをきき
 といふ種不出たを急種出ら
 らぬききくむしきい五にわく切
 秋の色にわくく女即花ひきき
 女即花をい女い女といひか
 梅園日記忌穢の余考之

作者部类云藤原俊忠大納言
 男

拾遺抄云四條宮四條南西洞院東
 廉義公家公任大納言家世雲立所
 也

詞花集 周防内侍
 胡邪ちひさしし多秋あきく
 こをさうけくしき
 頭注云くさくさのおぢみちち万葉
 おかろかかかわ世雲岡崎乃多
 未足道と人かきかみわつし君
 ちあさ曲道ふむ云、旋頭哥に
 萬葉集土巻多未足道かミナ
 ミナ七訓田道の意ちかみわち
 ちあさハ何まもよちかちかち
 小忠てうかハハれれちわあ

女郎志をさめる

草花隱水

実題 秋花をたぐひけりまをさていそをけあをさていむ
経末本 中納言俊忠の許きてまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 四條宮乃解あせよ人まをさていそを
夫木 おをさていそをさていそをさていそを
 秋情寄萩
夫木 あをさていそをさていそをさていそを
実題 の頭注 ら
夫木 の ら

あさひてハ訓非あてし鐘の響
 考一玉膳同玉小櫛ふさくさく
 況われしき

作者部类云左衛門佐藤良基後
 左大臣俊家男

保安二年開白内大臣家歌合
 一番左野凡 後頼朝臣
 右膳 基俊
 この田の地ちののちをさていそを
 さていそをさていそをさていそを
 基俊判云元吉女即花ひきき
 といふ種不出たを急種出ら
 ていそをさていそをさていそを
 とくちわくくくわかていそを
 といふ種不出たを急種出ら
 といふ種不出たを急種出ら
 部あてい

百を歌中より花をさめる

播磨 秋花をさぐりけりまをさていそを
風雅 実題 あをさていそをさていそをさていそを
夫木 殿下を野風いける
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
 同殿下を水をさていそを
 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを
夫木 秋花をさぐりけりまをさていそを

作者部美云琳賢 攝義濟子
或記云琳賢号之法眼
作者部美云隆原 若狹守通宗手
みしり竹垣六月条已注せり
葉集のすべのさしあつて葉集の
意ふらぬたるふてもあ

後鳥羽院御傳云勢あつて
りて安之故王御門内府亭にて影撰
の方一ノ教門是のたふたやと
出来し
無名抄云俊惠云のつものよ
たかかくり人の成物の如く
えむかすれや音はうと彼の
わめくを見んらや身ふあ
厚し云云木工頭の被ふ勢
云、是もたふらうと俊は
井註抄云是は去ふおけか
かきし

新続古今 為氏
つらむゆかの日けのえて
片と形をそ林のうもせ
源氏宿木巻云序花のよより
かきし

頭注云くさの糸あつて
足れたくさの糸あつて
登蓮と云ふの天子寺ふす知
あつてとて往て訪し真種芳
と云ふと略之菜和菊と略し
云云如く藤の穂は若色は如
世り云と云、経威卿云多
るり色のまらふと藤の穂は始
伴の芋の色に相似云
無明抄云わらふの藤は真麻緒
の心、是は彼れ胡麻の心とて
るなそこの糸をうけとて
ふらぬの乱るや云
まらぬ、真緒と曾保舟曾保
茶例多しけ、徒然草の出た
非山彦冊子考、答問雜稿云
頭注云真能野、みく及ゆ
五言通、故、わらふ、まら
我下紐付れ、鬼の志許草猶悉
て葉抑ひあつて、まの事頭取
案事別可註進
俊頼無名抄、奥後抄、雲御抄、繪語
抄、津瑤草、言塵集、等の鬼の草
の説、れ非ひり、神抄の頭取の考、
ろ、万葉集の鬼の志許草の鬼、醜
字、れ偏を省きて、り、志許と訓
と於ふ、ら、き、

○散木集

妻題

たぐくあふ志をうたふあつた
琳隆原イ賢法師乃大原の坊房は
ろりろりろりろりろりろり

夫木

山里山はたけもささやも
堀川院乃中時殿上の人、秋花題と
ろりろりろりろりろり

金葉

うつらふ其れの入江の流風は
田上乃藤うさふふりてと
たぐりろりろりろりろり

夫木

ろりろりろりろりろりろり
ろりろりろりろりろりろり

をのそ、藤をよめ

かきけてまゆ袖ふむれと
百そ歌中、藤をよめ

夫木

ろりろりろりろりろりろり
殿上トイして、秋野小女もあ
小原の風ふむけ、所をよめ

夫木

まのけろりろりろりろり
観音寺、雨の中、竹ふと、

夫木

ぬくま、雨をよめ、こ
紫をよめ

頭注云衣架のみをちりしてさすもの
のうた
和名鈔云衣架公雅注云施音移字
和名施懸衣架也
曾加施懸衣架也

夫木鈔秋三
秋の果より穴たつ一ツの男
そびしやうゆのこりしやうゆ
こゆす小靴のちりす一曾丹集
かきまらこりせりさかきあみ
よめり

和名鈔云蟋蟀一名和名木里
和漢三才圖會云木里木里頭
文苑玉露云春海木里木里頭
同木里の考と載りし回國雜記
標注考一

鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴
鈴和名鈴和名鈴和名鈴

秘傳光鏡云金鐘兒似似從織身黑而
長鏡前豐後其尾皆岐以躍為飛以
翼鼓鳴其声則磴枝々如鐘然此
蟲暗則鳴曉即止
此金鐘兒也

千載集 道因法師
夕ぬれしうさ林かむゆきと
麻のゆきうさ人かむゆきと

新撰守鏡云 於止呂

月詠集五月 成仲
時をき井ふゆきもさゆれと
こまらふとゆきゆきゆき

類題
ふのいふかききぬちとぬたをわいも人のうらむ

百そ歌中小蘭をくまら
堀百 類題
ふめけてゆきさよゆすふちとぬまきとぬらうのゆみちとすれ
夫木

さりーヤイさりーヤイさりーヤイ
家の達さりーヤイさりーヤイさりーヤイ

さりーヤイすわとさりーヤイすわとさりーヤイすわと
百そ歌中小すわとさりーヤイすわと

永百 類題
かきゆてゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
おひーと

永百 類題
夕夫木ふしんかきゆとゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
虫居夜友

秋のよとゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
百そ歌の中小ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

堀百 類題
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
たれゆきゆき長月のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

風雅
初夫木ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

頭注云くわが秋の葉(未編)を
れはて書(未編)と

山家集
はるこし庭のうらたひひもて
そとにうらたひひもて
秋のゆきさのうらたひひもて
もてさのうらたひひもて
後撰集
ついでとてさのうらたひひもて
とてさのうらたひひもて

いたが秋の暑き鳴子の声

作者部云伊勢守源俊重 木二
頭後頼男
新鏡古今 傀儡侍徒
車はつと君つとてさのうらたひひもて
わささのうらたひひもて

雅言集見云和す万葉を和し
時其奇の返歌とてむと相対なる
時のもてさのうらたひひもて
同一とてさのうらたひひもて

万葉集小伊奈武臣言とてさのうらたひひもて
後世に稲葉の言とてさのうらたひひもて
同補注冠註考詞草小苑等考と

かちけハ朦朧気の意は武臣か
けりてさのうらたひひもて
事とてさのうらたひひもて

頭注云くわが秋の葉(未編)を
れはて書(未編)と
山家集
はるこし庭のうらたひひもて
そとにうらたひひもて
秋のゆきさのうらたひひもて
もてさのうらたひひもて
後撰集
ついでとてさのうらたひひもて
とてさのうらたひひもて
山家集
はるこし庭のうらたひひもて
そとにうらたひひもて
秋のゆきさのうらたひひもて
もてさのうらたひひもて

夫木秋風

葉の庭のうらたひひもて
風のうらたひひもて

田上さし山田の方ささるる
てさのうらたひひもて

夫木
ささるる山田の方ささるる

曙ふ庭のうらたひひもて
胡戸あけてさつるさのうらたひひもて

一本元
庭のうらたひひもて

山里ふつとさのうらたひひもて

ことささるる和し作る

又田小庭のうらたひひもて

秋のゆきさのうらたひひもて

百そさるる庭字をさる

夜もささるる庭字をさる

田上さし庭のうらたひひもて

夫木
つとさのうらたひひもて

夜深閑庭

木のうらたひひもて

平経威朝臣家聚舍
四番 左 定長

後ハ油のものをかきまをふさつて
清輔を判官に後継にむす
五番 左勝 公重の左
主人の御さわれりあきの此の
ついでにかきまをふさつての序
判官左の御さわれりあきの此の
ついでにかきまをふさつての序
涙をふさつては後頼の御さわれり
御さわれりあきの此のついでに

古今餘抄云とともふ世俱世
ついでにかきまをふさつての序
あきの此のついでに

旅宿鹿

雲葉
系枕のあかしはさそふのありさうり
殿下ぞおれりいふまをり

とふふ艸の枕をむきふたはれりあきのついでに

野亭閑鹿 甲の山並で鹿の鳴きをききあはれり

千載 孝題
いさよふのついでに

木 鹿のあかしをききあはれり

殿下ぞ鹿のあかしをききあはれり

木 鹿のあかしをききあはれり

いさよふのついでに

木 鹿のあかしをききあはれり
みじろ山鹿のあかしをききあはれり
四宗乃文の御舎よ
けしよふのついでに
天末 雲葉

木 鹿のあかしをききあはれり
秋くれはあかしをききあはれり
障子の隙ふあかしをききあはれり
木 鹿のあかしをききあはれり
いさよふのついでに

○散木集

古今集 菅根
秋風からあかしをききあはれり
夫木抄 成助
秋のあかしをききあはれり
古今餘抄云とともふ世俱世
ついでにかきまをふさつての序
あきの此のついでに

顕注云らんとのかえと、鹿も
さうさ幸へのを心薩人
年随筆云あかしをききあはれり
紫の小葉のあかしをききあはれり

伊勢物依云昔惟喬のみこぞ
かりゆき云々は信長の人
たやみゆき云々は信長の人
てゆき云々は信長の人
まゆき云々は信長の人
ふゆき云々は信長の人
てゆき云々は信長の人
まゆき云々は信長の人
ふゆき云々は信長の人
てゆき云々は信長の人

顯注云々は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人
は信長の人

内守^{かみ}経國かの國は面白きおもしくしれは神殿の
まいておりくろはあ月の川にふりまきさい^か中將の
たねこつちまきとあるおありきし舟をこちてけの
けりあはかりあはれをせ給くまはかきけりて
あし^か紅いぬせ給いけりましめ

夫木

堀百霧

あさ日^かすすはのきかじつさえてたきくは身お世を恨
おき^か信長^か伴通のよとせ給き隔水よつる事
とく^か知る

英題

音^か月^か川^かさりのゆめたきけいさくまの敷はうと身
田上^か少^か務^かのたらしきうりてせのけしきり
くは^かい^かく^かゆ

夫木

旅人^かのきを^かけ^かて^かや^から^かり^かし^かは^かの^か海^かの^かき^かき^かり^かせ^かは
同^かお^かき^かご^か人^かの^かけ^かき^か旅^かの^かき^かふ^かき^かあ^かり^かゆ^かり
て^かし^かせ^かり^かく^かふ^か都^かの人^かう^かめ^かり^かり^かた^かれ^かは
ど^かく^かの^かき^かま^かを^かけ^かて^かか^かい^かの^かけ^かきた^から^かの^かあ^かの^かさ^から^かを^か
甲^か余^かの^か文^かの^か麻^か合^かの^かき^かと^かある
ま^かり^か也^かふ^かた^から^かの^かき^かも^かま^から^かめ^か松^かの^かき^かと^から^かび^かる^かり^かり
殿^か下^かの^か田^か家^かき^かの^かつ^かる^か事^かを^かと^かめ^かる

名所集覽云神山 近江栗本郡 田上山といふ

頭注云々... 小思... 小思... 小思...

駒迎八月諸国の牧り... 障子の後... 障子の後... 障子の後...

夫木鈔 清補

走井のけひの水の源... 走井のけひの水の源... 走井のけひの水の源...

公筆根源云駒牽... 公筆根源云駒牽... 公筆根源云駒牽...

望月御馬廿足

堀川院百首 仲實

あさの潮の移る... あさの潮の移る... あさの潮の移る...

八共並

山里... 障子の後... 障子の後... 障子の後...

障子の後... 障子の後... 障子の後...

百首... 百首... 百首...

百首... 百首... 百首...

田上... 田上... 田上...

田上... 田上... 田上...

河... 河... 河...

河... 河... 河...

頭注云玉川里... 頭注云玉川里... 頭注云玉川里...

後撰集 中務... 後撰集 中務... 後撰集 中務...

後拾遺 元補

もつら... もつら... もつら...

神中抄... 神中抄... 神中抄...

あさ... あさ... あさ...

あせ... あせ... あせ...

あせ... あせ... あせ...

あせ... あせ... あせ...

あせ... あせ... あせ...

百首... 百首... 百首...

松... 松... 松...

持衣... 持衣... 持衣...

持衣... 持衣... 持衣...

持衣... 持衣... 持衣...

持衣... 持衣... 持衣...

田家... 田家... 田家...

田家... 田家... 田家...

田家... 田家... 田家...

田家... 田家... 田家...

顯注云云の夜は此月此年此
拾遺抄云遍照寺廣澤僧正造地
山城名勝云云土人云遍照寺舊跡在
廣澤池西此

顯注云云の夜は信濃國あり
ひらきつゝ駒川の別名使として内
裏より駒川の合つてつらやと云

金葉集

忠誠

有明の月もあつて風
吹くつゝつらやと云
顯注云云の夜は信濃國あり
ひらきつゝ駒川の別名使として内
裏より駒川の合つてつらやと云
水底石を云古體風かた然水上月
はるけいよや又水の底やわづらむ
水六不連れ但おむら無指本晋

此の月もあつて日本紀より事なり
讀事ありたつていふれむらわら
やも水底石を云古體風かた然水上月
はるけいよや又水の底やわづらむ
水六不連れ但おむら無指本晋

高陽院哥合 左 攝津
了月の夜もあつて風吹くつゝつらやと云

右勝 俊れ
山のくまの夜もあつて風吹くつゝつらやと云

判云右勝の夜もあつて風吹くつゝつらやと云

續後拾遺 法性寺入道
齋宮記齋宮の内親王 白河皇女号
都芳門院在任五年承暦三年
善子内親王 白河皇子号六角齋
宮在任十九年寛治三年
前齋宮の夜もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

わづらむ月の水もあつて風吹くつゝつらやと云
八月十夜遍照寺を散月と云すやと云
さもあつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云
あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

水上月
輝の夜もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

兼題

あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云
あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云
あつて月もあつて風吹くつゝつらやと云

○散木集

二十四

玉露云思ひつゝあはれと俗思ひやりの
かゝる意を千載集借抄の巻に
しぬゆへに思ふは己心とて思
ひつゝあはれと俗思ひやりの
思ひつゝあはれと俗思ひやりの
思ひつゝあはれと俗思ひやりの
思ひつゝあはれと俗思ひやりの

作者部奏云周防内侍周防守平
棟仲女白川院女房

古今集
本のみちうらら月秋あはれ
らつゝのむすめあはれ
其後集世の中あはれと俗思ひやりの
権太左衛門尉のむすめあはれ
あはれと俗思ひやりの
月のあはれと俗思ひやりの

奥儀抄云月のあはれと俗思ひやりの
桂炭経の文也
中宮亮重家家言合ふ 李経
あはれと俗思ひやりの
顯廣卿判左の月のあはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
顯注云これ王子御尋戴安道事也
月入無事と不語空帰事也
晋王傲之居山陰夜雪和齊月色清
朗忽憶戴逵時蓬在剡便夜乘小船
詣之經宿方至造門不前而反入問其
故曰未乘輿而行興尽而反何覓安
道耶
唐物語 漢故事 和歌集
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

毎十
秋友とつる事をもつたる

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

夫木
わづらひの思ひつゝあはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

敬の月

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

あはれと俗思ひやりの
あはれと俗思ひやりの

三集

まはらちの夜上のもは月とて
しんしんあまの敷をすまはる

金葉秋 国九月のあは年八月十
又夜ふらあら 春と夫公侯
秋はあかのかうゆやう年あはれとて
やあて返る形

古今集

業平

大いふ月さめくさねをまら
つれ人の首ありの

人の顔をもてあひたれ

この顔もあはれははる月さめくさねの敷をすまはる

国九月ありまの月十又夜春と夫公侯

あて返る形

金 秋

秋はあかのかうゆやう年あはれとて

か

つれ人の首ありの

九月

九月十三夜於前武清泉亭詠閑見月副隔一夜

恋和歌並小序

制イ 別イ

拾遺鈔云西宮四奈北朱雀西高明
御子家

山家集
唐の石ふれたつらんかうりや
かあまふたや

伊勢物語さねる名はくたれハ文
もはらちの夜上のもは月とて
しんしんあまの敷をすまはる
不幹書人日本紀の幹をもて
抄さくみらふまつくあはれとて
物の長たはとて云はく不長と
はらちの夜上のもは月とて

あまふたや

唐の石ふれたつらんかうりや

伊勢物語さねる名はくたれハ文

もはらちの夜上のもは月とて

しんしんあまの敷をすまはる

不幹書人日本紀の幹をもて

抄さくみらふまつくあはれとて

物の長たはとて云はく不長と

はらちの夜上のもは月とて

しんしんあまの敷をすまはる

古今集序云世にあらはれんとこと
ふけさりの影れ心もやまるとも
とのさしのあつけいでひあせり

後拾遺 長能
我れ見かけて分つむむつと
かきつひなる初りのや

あめをたけぬは海人の持縄の長
網につつら大繩に持の皮を剥て
縄しとる

かすのあひらりちゆけとも。いかにせんをちなるものねた。
見らりのうらまふつけ。あくられうをやるや。ま
このあはれなるれやま。他のきかはあたるやま。
あうの言またくひねんよもの山くやあひひら。
さふらいうあして。さうけかきくひら。よ
つふらうらるまの。かきあつひのありまぬといひ
ぬさのいへるま。さあまのこらゆと。さうの
杜のうつく。このまてふあるう。さあま。あま
のさあまらりえ。うけあまもやあ。まくはゆの
ちさう。まあま。じうのうやあ。ひあて。やみろ

史記項羽本紀云富賁不歸故郷如
衣錦夜行 貫之
古今集 貫之
みみもねくちりあらむく山乃
とみんぶのあかり

山城勝心云天塩河源出自丹波
因赤流入波河也
清濁河源出於丹波 縣中河村廻
高尾愛宕麓未落大井河也
梅津、四條の赤桂河の原
金葉集の師賢朝臣の梅津の山に
ずりて、と、経信朝臣の歌の端書あれ
ひらの梅津も師賢朝臣の山に
辨官補任を唐乎去年十月八日任左中
五位下と有て光緒九年の條に左中赤正
位下源師賢不之頭藏入頭正月為修理
右宮城使七月二日卒とことり城志
中師賢朝臣梅津別業集と

○散木集

夜のあひらりちゆけとも。いかにせんをちなるものねた。
あすのあひらりちゆけとも。いかにせんをちなるものねた。
いへるま。さあま。じうのうやあ。ひあて。やみろ
いへるま。さあま。じうのうやあ。ひあて。やみろ
金葉 美穂
いへるま。さあま。じうのうやあ。ひあて。やみろ
未木
いへるま。さあま。じうのうやあ。ひあて。やみろ
九月十二夜大井河より舟りて船子のりて
さあま。さあま。さあま。さあま。さあま。さあま。
洋にありて月を照らすと。いかにせんをちなるものねた。
とあ。

建替仙洞歌合 左 從三位
 天のふさやの光と一しつしつ
 定家卿判云さゆの光をさゆとせよ
 山又昨日今日もさゆの光をさゆ
 冠辭統絶云さゆの光をさゆ

和名鈔云周札註云澤無水有草木
 曰藪也

大貳長実の家之新合世のさゆの光をさゆ 未遠イ

又人のさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ うかい

扇下あてさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ

月とさゆの光をさゆ

千載
 月れたあゆの光をさゆの山乃若の光をさゆ 川の頭注

月前懷往事 談イ

あり世とさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ 一本後

百首詠中ふ若とさゆの光をさゆ 菴月イ

ひつりゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ 一本前 美題

歌仲る家の八條の家とさゆの光をさゆ のわりイ

下村さや月のさゆの光をさゆ
 とさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ

題注云遊子行月の心

萬葉集十四卷
 可良須笠希於保手曾村里能麻左
 低尔毛伎麻左奴伎美乎許呂久等
 曾合奈久
 靈異記云加良須止伊布於保手極
 止利云

拾遺愚草中
 依風の月とせさゆの光をさゆ
 ひつりあゆの光をさゆ

月とさゆの光をさゆ 未木

るそくそその光をさゆの月とさゆの光をさゆ 夜イ

又人のさゆの光をさゆ

いさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ こイ

明月如昼

くぬもさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ 美題

あゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ

河乃小舟とさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ 新也

漢齊明月

とさゆの光をさゆの月とさゆの光をさゆ 美題

徒然草八月十五日九月十三日書也
此卷清明抄也
諸書小論

神抄云...
此卷隨筆一卷...
六條宰相家...

右
願輔朝臣
...
右云

拾芥抄云東三條一條院誕生所或
重明親王家...
志仁公家...
小夜時雨云...

田珠菴雜記云六帖小本枯の音...
...
秋の初風...

神祇伯歌仲のものと云く九月十三夜人々歌ふ
々々々

たぢりつらむの月はぬねをみよ...
殿上りたり...

く月をみよ...
月前...
金書

あ...
別...
御

新...
雲居寺...

ま題
...
殿中...

夫木
...
月...

...
殿の池...

...
ひて...

千載後葉
...
修理...

風雅集

清補

いづれもふかき月をいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

後拾遺 挿右大臣
もみちの月をいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

神代紀 書曰夜句茂多甚伊都毛
夜爾鐵杖甚磨語味夜霜鐵杖
俱盧贈延夜霜鐵杖回
大日本史曰白河藤原中官諱賢子
右大臣源頭房女也開白河安養為
子延久三年入東宮為御息所居履
景殿即位為女御叙從四位下承
保元年六月立為中宮

いづれもいづれもいづれも

全葉

兼題

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

夫木

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

遠情

月前述懐

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

月前述懐

兼題

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

夫木

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

○散木集

三十一

玉葉集

内大臣

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

新古今

經信

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

頰注云、水の水面水の面と詞を略
たゞこの色を赤たるとは平下り
魚の赤も色の赤たるを平下り
異名云、宇都保物語同譲巻
君より、さかたけの山川
あさひの山川、さかたけ
是、大持松よりあさひの山川
中、傍り返り、さかたけの山川
徳成「一」
能代語云、さかたけの山川、さかたけ
今も高川の水龍神里ありあり
願注の方より、あさひの山川、さかたけ
とあり、さかたけの山川、さかたけ
あさひの山川、さかたけ、俗にアサヒ
と云、龍の交りて有る、さかたけ
公忠集

池水のさかたけ、さかたけの山川
約さへ、さかたけの山川、さかたけ
胡詠集 月

中右記云、保延元年九月十二夜、今
宵雲清月明、是寛平法皇明月、
之由被仰出、仍我朝以九月十三夜
為明月之夜

和名鈔云、盂洗食、経云、蕎麥、
一云、性寒者也、
食療正要云、蕎麥、俗名所、
稗二種、信尾三州及江之根、并
出者、最爲上品、京人七月、採葉、
熟、候祖先
或入三谷川、土清の説、不実、大い
稜高、土高倉、さかたけ、
稜高、さかたけ、
稜高、さかたけ、
稜高、さかたけ、

浦一まりのすけをさかたけ

続古
の面影をさかたけ

月の前乃つらにうつりて魚のあさひをさかたけ

夫末
さかたけのあさひ

夫末
月のつらにうつりて魚のあさひをさかたけ

夫末
月のあさひをさかたけ

月のあさひをさかたけ
九月十二夜、
法性寺開白

続古
おぬしの人をさかたけ

昔よりかきつる月のさかたけ
秋の山乃月をさかたけ

さかたけのあさひをさかたけ
田上少るがのりよりまたちぬくる柳のあさひをさかたけ
さかたけのあさひをさかたけ

夫末
柳のあさひをさかたけ
さかたけのあさひをさかたけ

題は「九月九日」(後期)か「九月九日」
 万葉集より其花と我をみせしめて
 衰花を撫ふ菊の不老の菊と
 不可有驗と流
 新勅撰 徒一位倫三菊の御多
 是は花のこひまをいひしは
 菊のありをいひしは
 菊のありは千代にわたり
 菊の花をいひしは
 小倉の隣女晴言生冊に松葉下
 技考(一)

にく入食(源氏)松の葉をよめて
 二り日本紀送飯といひしは
 新撰字鏡小楷といひしは
 頭注云酒は竹葉と云
 竹の葉は酒と云ふは花吹雪
 五一は酒の徳をいひしは
 考考(一)

梅園日記云花吹雪秋は重陽の菊酒
 飲は花と吹雪あそび云重陽は
 九月九日花吹雪と云ふは
 菊の花の奇なり未秋酒題は隆
 季竹の竹の葉を折して花を
 吹くは玉の盃と詩を作す菅家
 文章の巻中九日對菊書懐詩は口未
 吹花酒盃を有を併せたりは花
 と吹は益半の菊花を吹すは感勝
 竹の葉と云ふは
 雅言集見花吹秋の流は

後拾遺 道洪
 菊の葉を吹くは花吹雪と云ふは

後拾遺 清基
 菊の葉を吹くは花吹雪と云ふは

かきく小見えくれはとて

そららのりよる月の月と人きまをくらをよの友とみる

九月九日菊のこひかみりて人のこひれはとて

ちりちりふくちるかほのふねはなつとてとてのきりあや

菊葉のよ

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

田上はゆきかき九月九日菊のこひかみりて人のこひれはとて

と菊をよめてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

竹の葉ふくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

菊の葉ふくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

修光太史歌集の古条のよきて残葉留妹といつ

菊の葉をよ

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

百首の菊の中よ菊をよめて

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

菊花映霜

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

大京太史修光の許りて残葉留妹といつ

さくさくははくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

雅言集覽云ぬきみふひとふの
らむら

世にナリウナクニ一 熟柿小傳云
今今集云世にナリウナクニ一
みる少一 後撰集云世にナリウナクニ
我々ノナリウナクニ一

殘葉常五相

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

出家集下
紅のつらねりなりなるとのふ
かしのつらねりなりなるとのふ
雍州府志云柳倉山或謂小倉傳言
古木殿之官倉在斯山下或謂伐採
此山之薪柴納官倉之倉明神社在
斯麓

頭注云わこの山は信濃国すわのなる
烟立所 駿河の富士の山に常小畑立所
少く有る所の山かかたる所と後同大
明神と名づくわこの山なるは是故
古木殿之官倉同所にて之人俗を極
傳事

阿坂山と袖岡山と同処也云りあこの山
と云一本し有るなり

名所集覽云千山、近江栗本郡田
上山といふ
源氏若菜卷云父君の山出のつらね
もみり、わこのつらねをわこのつらね
みだるやとてわこのつらねをわこのつらね
と云はれしなり
頭孝御判詞云衣手の杜と云はれしなり
紅葉にわこのつらねと云はれしなり

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら 秋のよものなるはづゆけき人まら

頭注云、たらし山万葉より殺山行
 道の稍々たらし山万葉より殺山行
 高郡いたし山近江留賀郡
 未木 鈔ふこの山のあぢるわつて
 近江

元永元年内大臣兼右合俊頼云々
 元永元年内大臣兼右合俊頼云々
 元永元年内大臣兼右合俊頼云々
 元永元年内大臣兼右合俊頼云々

都のよりにまうてまうて秋みく旅宿雨とまま心イ
 とうの初秋ひきまきひの初まき風よりまよのあつと
 とうの初秋ひきまきひの初まき風よりまよのあつと

いあめやぬいさくもききふのあひてまらりゆく
 時雨降る多まじりまじり
 時雨降る多まじりまじり

おわつれいふまきみくるわううみ山をかきふせぬけリイ
 おわつれいふまきみくるわううみ山をかきふせぬ
 おわつれいふまきみくるわううみ山をかきふせぬ

頭注云万葉三百のたのちのち又云
 のい井詩と取集て百傳の五十のち
 日本紀万葉集等小百傳とある古事
 記万葉集等小百傳とある古事
 記万葉集等小百傳とある古事

田上まきぬの山おのわりてあまひくふまゆ
 田上まきぬの山おのわりてあまひくふまゆ
 田上まきぬの山おのわりてあまひくふまゆ

原氏録巻

この巻は、さうしうふりあはる
いふもや、あふあけあけ
作りつゝ、
村文の流るあけあけとて
事多々な難ふあり

立田川大和国平群郡とて、
響考一又龍田考併一

顯注万葉歌云々ゆゑか、
り名の、の、の、の、の、
和歌の、の、の、の、
不、の、の、の、
季、の、の、の、
奥、の、の、の、
み、の、の、の、
次、の、の、の、
大、の、の、の、
紅、の、の、の、
毛、の、の、の、

か

そなたの指さすもうらな
らちるを結さるらちる
も、

たつこの山を
る

都を、清ふかして
心取あつたつこの山
乃岩け

百、の、の、の、
中、の、の、
紅、の、の、
と、の、の、

三、の、の、の、
に、の、の、
神、の、の、
の、の、の、

殿、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

雲、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

四、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

ま、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

あ、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

大、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

風、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

小、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

水、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

あ、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

山、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

輿地通志云大和国平群郡般名瀬社
在神南備東車瀬村
行慶抄南遊五卷云大和国平群郡龍
田越云岩瀬川左三流大河瀬
ヲ云岩瀬川右三流大河瀬也
契沖云岩瀬川古くす及んば後頼朝臣
八物押す人ぬ岩瀬と云ん依
て川も直すと云ひて下れと云
よひひと云

奥、の、の、の、
の、の、の、
の、の、の、

支集ふりつらふ神ふと入ると
出ると共集三月歌花とこと春の
山嵐のよみ

萬葉集ふまはれんはよみうとらふ云
しり

八雲口傳云日しれぬ人も改ぬ山里
このあつたのまゝにりして
日くしれぬ人のまゝにりして
わがたの香上手のまゝにりして
やうしやんてんもまゝにりして
そは捨さへ入らぬか行正木の
うたふひり姿とてはるや

守山近江国野洲郡也

てんむ羽裏して養育するま
んくろ子とひりてまて作
おまのまゝにりして

らうりちと

永百 永
うけうの山嵐はとぬふうと本のまゝにりして
かろ

萬葉隨風

あゝはけまらふりしてまらふまらふまらふ
かろ

深山落葉

新古 永百
日くしれぬ人のまゝにりして
かろ

左京右京のあふのあふ嵐送山まらふまらふ
かろ

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

作とてはる

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

いら田乃杜のまらふまらふまらふ

くらもれんもまらふまらふまらふまらふ
かろ

終夜閑落葉

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

大井河道遥人ぬりてはる

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

神皇月の十日は田上り初

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

とてはる

あまの山のまらふまらふまらふまらふ
かろ

拾遺集
 昔よりとてつがを糸はたきしるの
 洞の玉のちをちやるる心
 古今集
 若水くさくさの糸はたきしるの
 後の玉のちをちやるる心
 かねて内さお少づつものおまねは
 世ととさうつあふさうつあふ
 和名鈔云唐韻云稽 後漢書稽詭於
 比正 自生稻也 路質於比俗云

頭注云いづのせ所を田上川あり
 延喜内膳式山城国近江国水魚網
 各一處其水魚始九月迄十二月三十日
 貢之
 和名鈔云考志切韻云鮒 今按俗云
 白小魚名也似鮒魚長二寸者也

拾遺集
 あり本小つわつわつしからしき
 ひとてしつらりしつらりしつらりし
 頭注云いづのせ所を田上川あり
 かねて内さお少づつものおまねは
 世ととさうつあふさうつあふ
 和名鈔云唐韻云稽 後漢書稽詭於
 比正 自生稻也 路質於比俗云

関内書懐

永百嵐
 冬三雜六
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え
 さり多きいづつりりる

夫木
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え
 さり多きいづつりりる

夫木
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え
 さり多きいづつりりる

堀首
 つの万ふけりる前らのこは素うとをてまうい
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる

葵題
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え

葵題
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え

夫木
 ありそらおさひつちのかけつたゆらゆらとさるる
 田上は竹多は後重くさう心静とやれ見え

詞花集 燕感
 いよいよわ〜やいた〜ゆめ〜
 わ〜した〜さ〜ら〜つ〜わ〜り

願注云初句野野からし〜と云うは
 云々〜は昔の心はひ〜り〜り
 玲瓏〜手〜し〜り〜り〜り
 小し〜り〜り〜り〜り
 かし〜り〜り〜り〜り
 かし〜り〜り〜り〜り
 かし〜り〜り〜り〜り

願注云〜と鷹の取たる雄の片胸
 と取水述べて洗ひて鷹が〜と取
 飼〜と取〜と取〜と取〜
 庭のち〜と取〜と取〜と取〜
 庭のち〜と取〜と取〜と取〜
 庭のち〜と取〜と取〜と取〜

五代
 五月
 山王さま〜り〜り〜り〜り〜り
 野行幸

山王さま〜り〜り〜り〜り〜り
 野行幸

野行幸

又人〜り〜り〜り〜り〜り

あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 願注云〜と鷹の取たる雄の片胸
 と取水述べて洗ひて鷹が〜と取
 飼〜と取〜と取〜と取〜

又人〜り〜り〜り〜り〜り

頭注云... 和訓... 萬葉集... 神代... 今...
頭注云... 和訓... 萬葉集... 神代... 今...
頭注云... 和訓... 萬葉集... 神代... 今...

和名... 繩也... 詞花集... 和名... 繩也... 詞花集...
和名... 繩也... 詞花集... 和名... 繩也... 詞花集...
和名... 繩也... 詞花集... 和名... 繩也... 詞花集...

儀云... 新... 登... 宣... 大... 日... 飾... 如... 赤... 小...
儀云... 新... 登... 宣... 大... 日... 飾... 如... 赤... 小...
儀云... 新... 登... 宣... 大... 日... 飾... 如... 赤... 小...

○散木集

夫木 美題
みち... ち... ち... ち...
夫木 美題
みち... ち... ち... ち...

夫木
沖... 志... 志... 志...
夫木
沖... 志... 志... 志...

夫木
難... 志... 志... 志...
夫木
難... 志... 志... 志...

夫木
あ... 百... 百... 百...
夫木
あ... 百... 百... 百...

夫木
あ... 甲... 甲... 甲...
夫木
あ... 甲... 甲... 甲...

夫木
あ... 百... 百... 百...
夫木
あ... 百... 百... 百...

夫木
あ... 五... 五... 五...
夫木
あ... 五... 五... 五...

夫木
あ... 新... 新... 新...
夫木
あ... 新... 新... 新...

和訓集云... 陪従... 府生... 歌人管絃の人... 賀茂... 幡の祭... 東遊... たり者は是之

拾玉集三
... 山家... 風... 新号竹集云... 屋の棟のあれ... さいつくりらぬ

和名鈔云... 盆... 赤漆... 乗て漕... ひや... 盆... 轉... 小... 宮儀... 十六卷... 悉

雪あつてさびつる... かしらけけけ

十二月

百を... 風雅 堀百

... 山家... 夫木

... 堀百

... 風... 夫木

...

... 堀百

... 堀百

...

... 堀百

...

...

...

月光映氷

池水ようひて...

...

...

○散木集

三十三

千載集 大皇太后宮
木のよらうとあつちるなるのよ
りけり 秋のけりみこもる

六帖二
ゆてめとあつちるの君外は
けりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

万葉用字格云黄土和名鈔填土昔而
細密曰埴波乃ありぬ其黄土の出
る処と云埴波土の埴土生る処と云
云云と云知

山家集下
あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

後拾遺 和泉式部
秋のよらうとあつちるなるのよ
りけり 秋のけりみこもる

堀川院百首 国信
水のよらうとあつちるなるのよ
りけり 秋のけりみこもる

依月不忘秋

夫木 夫木
他のあふやとる月新らるけり 秋のけりみこもる
月はあつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

永百 永百
あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

永百 永百
あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

永百 永百
あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

あつちるの君外はけりもあつちるの君外は
とあつちるの君外は

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

氷閉水鳥

夜半さしむむさや水もあつて雪のせささめくさ

氷閉水
類題
類題
類題

真野池水とつるんを

氷閉水とつるんを

池氷とつるんを

氷をとつるんを

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

類題
類題
類題

山雪とともめ

年々も布衣の事なきは女もさあはれものさしむ

高陽院殿う合よ言をさか

千載 少言 千後 夫詞

おろもいなるのけりしうもなれはちのやあちりも

夫木 俊業 続詞 未題

かかちる道酒よりこころいさつとて人かたはれぬ

らうりておじのちささくちりなれはひつら

々々

あはさいしちのきをぬあつたが初めをささくみよ

之

家道朝臣

そらもいなるのをかかんとてちりちりささく

高陽院寺合雪左勝 抄律
あさも杉のちりしりて
あさもいなるのけり
右 俊頼
あさもいなるのけり
判三左衛門 俊頼
作者部云左衛門督藤原家通
大納言實通男
家道朝臣

頭法云たれは始煤の曲方集
波若かや断たれおのつた
とにちりまのあはれは
西下とちり入合也と和名抄
洋へちり流たれはちり
のけり越前国小瀬と云あり
けて湖とちりちり湖と云
名所方角抄如賀国蓮浦茶
ちりてはちりちり越前
芭蕉與細道云越前国坂
とちりちりちりちり
和名抄云文字集略云
秋成云破道と云の陰道
山のけみちとちりちり
ちりちりちりちり

大貳長實卿の家少く秋合せし

よき未題

雪うらたぬもささくちりちりちりちりちり

殿下少雪中遠情ささくちりちり

おろもいなるのけりしうもなれはちのやあちりも

かかちる道酒よりこころいさつとて人かたはれぬ

らうりておじのちささくちりなれはひつら

々々

あはさいしちのきをぬあつたが初めをささくみよ

之

かりし小深とこり

堀川院百首 頭仲

昔むらもゆきもももなむな竹
吉中の山みみさうり

詞花集 小一条院

世中と思ひ入るみうら山
こり雪月のもなむらこり

世集志部いんしんしんしんしのれと
混本音いんしんしんしんしのれと
ナリ正源氏常夏巻のどろり
を形むねもさうりもさうりもさうり

は乃^ヤ店^ヤの福^ヤあれあふとるまに我^ヤりりそめのうらさりり

山^ヤもさうりゆん

けさ^ヤもあ^ヤさ^ヤのう路^ヤはさつみて昔^ヤのま^ヤりるさうりつじ

冬^ヤ夜の月^ヤとよめ

み^ヤく^ヤ山^ヤ種^ヤれま^ヤをか^ヤらて^ヤあ^ヤる月^ヤのま^ヤと^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ

ま^ヤのあ^ヤら^ヤ女^ヤのう^ヤら^ヤら^ヤ

い^ヤく^ヤも^ヤお^ヤら^ヤら^ヤも^ヤれ^ヤも^ヤゆ^ヤき^ヤの^ヤあ^ヤら^ヤも^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤ

十^ヤ首^ヤ歌^ヤ中^ヤま^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤ

雪^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤの^ヤま^ヤら^ヤら^ヤら^ヤたら^ヤ烟^ヤさ^ヤけ^ヤさ^ヤら^ヤ

又^ヤ人^ヤま^ヤら^ヤら^ヤ

続後拾遺

信實

神^ヤの^ヤい^ヤせ^ヤの^ヤ杜^ヤ乃^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤ
み^ヤひ^ヤ乃^ヤの^ヤ山^ヤい^ヤせ^ヤら^ヤら^ヤ

二^ヤ有^ヤい^ヤと^ヤい^ヤは^ヤい^ヤと^ヤの^ヤい^ヤと^ヤ拾^ヤ遺^ヤ集^ヤ
和^ヤ訓^ヤ語^ヤ云^ヤ々^ヤ後^ヤ拾^ヤ遺^ヤ集^ヤ
意^ヤ解^ヤ一^ヤ保^ヤ氏^ヤの^ヤ人^ヤの^ヤい^ヤと^ヤ
み^ヤく^ヤ六^ヤ帖^ヤも^ヤ月^ヤけ^ヤみ^ヤく^ヤは^ヤら^ヤ
前^ヤの^ヤ証^ヤを^ヤ考^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ
み^ヤく^ヤい^ヤ見^ヤ隠^ヤ雜^ヤ部^ヤ之^ヤ一^ヤの^ヤい^ヤ
の^ヤ西^ヤ考^ヤ任^ヤを^ヤ

金葉

一^ヤは^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤ

衣^ヤの^ヤさ^ヤら^ヤ多^ヤ小^ヤ神^ヤ娘^ヤの^ヤみ^ヤら^ヤの^ヤ山^ヤま^ヤさ^ヤら^ヤら^ヤ

朱題

雪^ヤ典^ヤ歳^ヤ條^ヤ

山^ヤ里^ヤの^ヤま^ヤら^ヤら^ヤら^ヤや^ヤら^ヤら^ヤ年^ヤの^ヤい^ヤと^ヤら^ヤ

丹^ヤ波^ヤ前^ヤ日^ヤ香^ヤ房^ヤの^ヤ家^ヤ也^ヤ中^ヤ待^ヤ友^ヤと^ヤい^ヤら^ヤを

と^ヤゆ^ヤ

こ^ヤぬ^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ山^ヤ里^ヤの^ヤま^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ

赤^ヤ良^ヤの^ヤ歌^ヤ合^ヤ人^ヤふ^ヤら^ヤら^ヤ

雪^ヤの^ヤい^ヤあ^ヤら^ヤの^ヤ山^ヤも^ヤみ^ヤく^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ

雪^ヤ胡^ヤ眺^ヤを^ヤ

か^ヤら^ヤめ^ヤら^ヤら^ヤの^ヤ山^ヤも^ヤみ^ヤく^ヤら^ヤら^ヤら^ヤら^ヤ

○散木集

三三三七

夫木鈔

俊惠

夫木鈔を讀むに於て、
 久保の才左尾又爲の事、
 頭注云、
 丁野の室の金、
 降夜の民の電、
 年の内の事、
 日、
 神中、
 正十考、

堀吉 表題

夫木

晦日

此の年、
 宋書、
 神、

宋書の秋

夫木
 神

神

